日本刀の形狀寸度に就ての資料

（東京帝國大學工學部日本刀研究室報告第二十四）
太田熊太郎
福田瑞二

刀劍の長さ、反り、幅、重ね及夫に附隨した二三のものに就て刀劍製作上の參考となるべき説を今迄に目にすることを得たる刀劍書の中から拔萃する。

只遺憾なことには夫等に就ての説が割合に少い爲勢ひ一二の刀劍書の復寫に過ぎないやうになつたことである。

そして夫等の説は次の表に示すやうな順序で蒐錄する。

第一長さ(寸尺)
　イ、帽子(切先)　ロ、中心及目貫穴
第二反り
第三幅及重ね
　イ、肉置　ロ、鎬　ハ、樋
第一長さ

刀要錄に

兵伏に定れる寸法といふことなきは人の長短强弱同じからざればなりされば刀の長短と銘々の强弱に應じて指料となすべきことなれば其大概は身體の寸尺に應じて度るべきことなり世間の兵法者流多くは二尺五寸に八寸柄といへるを以て其規矩とせり是又身體の寸尺をもて度るべし

是をおのがたばかりといふ其法人指の一節を一寸と定めまた人指と大指とを一盃に延たる寸を五寸と定め此度をもつて一尺五寸に度るに大概塚原卜傳が長き刀の限りは刀を倒に立て其鍔臍に至るものを度とすといへるに應ぜりされども是は身體の大小長短をもて規矩とするの法にして身短小にしても筋骨太く臂力逞しきものは此度を踰るの長大成刀をも指べし又其身長大なりとも性質虛弱にして力量劣れるものは短き刀を指すべきこと勿論なり其餘は臂力の强弱と其道の鍛練とによるべきことなり又長短の勝負得失に至りては長しといへども槍には及ぶまじく短しとも脇差にはまさるべければ長きも必ず短き所ありて短きも亦長しとする所あり此の故に古人も長短一味をもて論ぜしなれば今再論ずるに及ばず又古今の變革を考ふるに古しへ源平の戰の頃は槍なくして馬上の太刀打專らなりし故におのづから太刀の寸も長く三尺以上のもの多しと覺ゆ元龜天正に至りては槍盛んにして一番槍をもて武功の第一とし太刀の働は槍脇の高名となりしより各一番槍を心懸るにより諸馬歩行立ともに槍を身に離さず機に應じ馬をも乘放つて槍を入るゝにより刀長大なれば進退自由ならずゆゑに刀の寸も短くなりしなるべし云々。

窪田請音の劍尺記及び刀劍長短論に

(前文略)長短一味とも長短無別ともをしてめていへるはうきたる理りなりそのもとこの論ひは佛家の說にして此の理なきにはあらねども大かたのそはあげつらいにて一味といひ無別といふか內に自ら別ちあることは委しく佛家の理りを得て知るべきわざなり云々。(刀劍長短論)

太刀に長きと短きあり人の身にたけ高きと低きとあり又力につよきとよはきとあり活き業にまさりおとりありとところに廣きと狹きあり場のあはひに遠き近きあり又馬上歩行立のわかちあり夫がほかに又時のいきほひあり人としては長きを扱ひなれたると短きに手なれたるの分ちにておのも〳〵も分るればよく其わかちと分ざればいひ得ることかたし云々。(刀劍長短論)

(前文略)我流事は立あかりて刀を地につけ鍔の臍に當ると定めとはするなり臍を越たるは拔難しといふかたあり此定はたかはかりの定めなれば一かたにはよしともいはんなれども是も刀を常にあつかひなれざるなり古しへの傳への如くせんには身の丈五尺五寸あらんには鍔先四尺迄の太刀はぬかるゝことは明暮習はしてしるべし(劔尺記)

(前文略)二尺五寸より短きは太刀には無德なり人として二尺五六寸なるを長し重しなどいはんもの、その劍法を學びたりとも益なし眞心に習し學びたりすればいかによはきものなれども二尺七八寸なるは大方に扱心のまゝなるものなり云々(刀劔長短論)

(前文略)扨當傳には先師の定めとして身の丈五尺五寸もあらんには三尺二寸の太刀に一寸のはゞきをうけて鍔先三尺三寸迄あるは拔きしも働もことかくことなしとの傳あり又小男なりとも武夫のなりたに歳男になりせば二尺五寸の太刀はいかにもあつかはるとの定めなり此事は先師の多く教へるをなじはして試み玉ひし事にて曲尺の定めのしゐことにはあらず又人によりては三尺五寸にも四尺にも五尺にも其餘にも分量にまかせて人々の手にだにかなひなば一寸も長きを持つてよしとすべしとの傳へあり云々(劔尺記)

刀劔實用論に

又刃味は刀の頃合に依る事御座候愚老壯年の時は放淺右衞門が弟子となり度々千住の試に出候ひしが長さ三尺の刀には乳割の落ちたる事御座なく候然るに其刀を二尺三寸にも摺上げて切候へば土壇拂に切れ申候是全く切手の勢力が餘りて切れざるにて御座有るべく候

古今鍛冶備考卷一に

刀劔の寸尺長短は其主の身の大小力の强弱に從ひて相應の寸尺を用ふべし相應よりも短く輕きに利あり。

雜誌刀の研究第四卷六號所載江城浪士と名のらるゝ仁が刀劍の寸法に就て次の樣なことを述べてをられる。

刀劍の寸法は各流義によつて同じからず古來各流とも秘傳として之を公にせず故に其各流の寸法は一に之を述べず唯僕が若年の頃聊か修得せし或る一流の寸法を茲に披露せむ。

刀劍の寸法は其持人の身長に「四六」を乘じたる尺寸を以て普通と定む(即ち身長五尺三寸の人なれば其尺寸は二尺四寸三分八厘の所其三分八厘は五分に切り上げ之を二尺四寸五分とするが如き例)但寸法は其刀劍の區より取らず其鍔先の寸法なり又鎗を專用する場合は其人の身長に「四」を乘じたる尺寸を以てすべしこれ鎗を使ふに長き佩刀は妨げ多ければなり。

イ、帽子(切先)

い、一、ぼうしのかたちは業にかゝりてはのびたるかたちを好べし其のびたるかた大にまさるなりされども長さにもよることなり近世の說には切先長きは損じやすしとていかにもつまりたるを好むものあり此さまなるも古くよりきれ〳〵にそれことなれども大業をなすは切先の大なるにあることありこれを古作業物と世にいふ太刀にぼうしつまりたるとなしこれにても知るべし。

一、ぼうしの長き短きによつてかけ損じなどするは地鐵の鍛と燒ざまのほどに有ことなりされども餘り肉薄きをかたきにあてもしたらんにはいさゝかを損ずすることも有ぬべし又太刀刀を試むるに其刃業におよぶと及ばざるとのわかちあり又こゝろむる人の功と不功とにもよれりかた物などこゝろみんにはいさゝかも手の内のゆるみもし又左右手の内いづれかたらはぬかたありて刃そむく時は刃を損じぬべし之等は太刀刀のとがにはあらずしかれども大かたの人はおのれが足らざるをはいはずして刀のとがとはすべし。

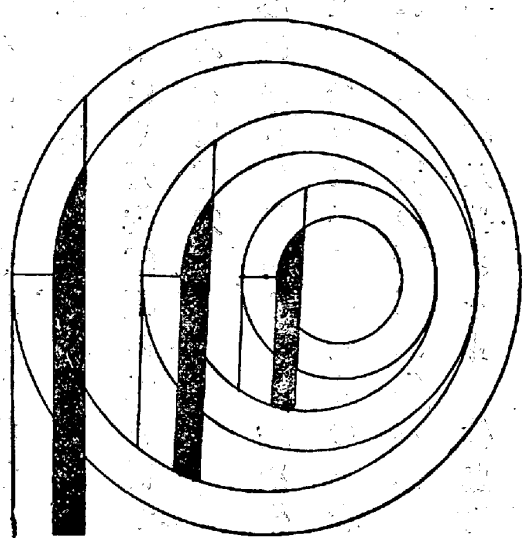
一、二尺より短き物にて切先かゝりに打こまんには太刀幅子(幅重子?)よりも烏のくび作り菖蒲作りなどのたぐい業はまさるもの也二尺より長きものゝ上にては本作ぼうし延たるかたを好むをむねとはすべし烏のくび菖蒲又は平作りの類ひはあしし、古作にもまれなり長きものゝ作のことは德なきかたとはするなり。

一、二尺五七寸三尺もあるにぼう〳〵五六寸も有物ありあまりにぼう〳〵長きは上おもくしてあつかひならざれば其物の德不德よりあつかひに德むとくありこの作りなるは物を長くするときはあつかひたがふことなしこのこと別に習ひあり。

一、二尺五六寸もあらんにはぼう〳〵一寸七八分二寸も有をよきほどとはすべし切先はづれにうちこみ大業をせんにはぼう〳〵つまりたるはあしし。(撰刀記)

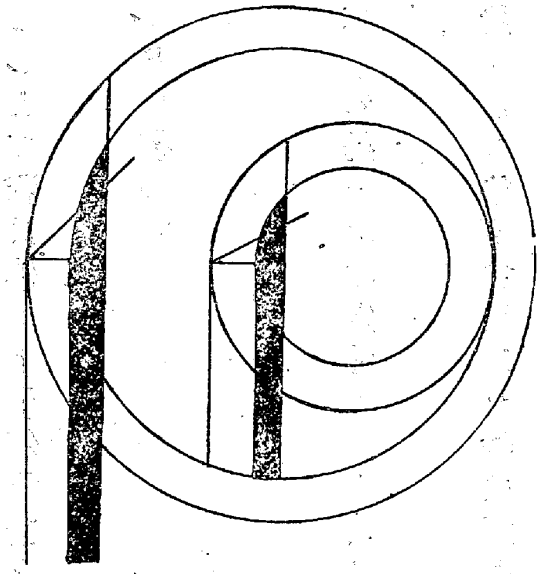
ろ、一、切先の格恰も又左に圖(第一圖)するが如く圓規に法とるべし是に付て俗に扇形と唱ふる事あり則圖(第二圖)するが如く帽子横手際より筋達に矩を當て立るに扇の形なるもの出來る故なり

第一圖



帽子之形法圓規之圖

第二圖



帽子扇子形の圖

大切先小切先共にそれ〳〵格好能くひづみなきことよしとす猶口傳あり。(刀劍辨疑上卷及劍工秘傳志卷之中)

刀劍秘傳志下にも刀劍辨疑の說と同樣のことを述べてあれども省略する。

ロ、中心及目貫穴

い、一、中心は短きに利あり。(古今鍛冶備考卷一)

ろ、一、柄は鍔先きの長さの三分の一を以て定法とす但鎗專用の場合は其定寸よりもなるべく短くするに利あり。(刀の研究四卷六號所載江城浪士寸尺の說)

は、一、忠長さの事刄長さ一寸に付忠長さ三分の割合なり然れども格別に幅廣き物は割合より長き方釣合宜し口傳。

一、短刀七八寸より九寸五分迄忠長き三寸五六分釣合宜し是は握一束に少し餘る方宜し但し握り一束を三寸と定る也是又格別に幅廣き物は此定より長き方釣合宜し。

一、小脇指一尺以上一尺二三寸迄は忠長さ割合よりは少し長き方格恰釣合宜し是も格別に幅廣き物は口傳有り。(劍工秘傳志卷三中及刀劍辨疑卷之上)

に、一、中心に長き短きあり應永の頃の備前作りはことになかご短かしこの故は後世上のおくれたると劍術者などの好むとことかはりて上重くして打こみ强く當るべきためのもうけなりされどもなかごあまりに短きをよしとはいひ難し頭のきは迄にも及ばざれどもなかごの長きかた手のうちおもくして扱ひはなしやすし。

一、なかご太きは柄の木しろ薄くして破るゝものなり柄には鮫の皮をきせたる上を組糸にてもさきてはいとうきじけれどいさゝか木しろなくてはたもちあしゝ柄はいかにつよく物にふれても破るゝ所はなかごさきのみさして外々の損ずるものにはあらずされど其の心得有べし

一、古作に雉子もゝとてなかごの中ばより先を落したるものありこの作りざまなどは心を用ひたるなり古作の柄に近世のごとく太き丸きつか形はたへてなきことなれば中ごさきを落して木しろをもたせたるなり此中心さき後々の作にもこれかれみえたり

一、相州物などはたなご腹とてたなごといへる魚の形に造りたるありなれどもなかごさきを破らざる樣にこゝをこめて先をほそくは作りかまへたるなればなりこれらのわかちも辨へて其上きかたを用ゆべきことなり古への柄の細きさまは其ころのまゝなるものゝ今に殘りて傳りたる物のまゝあればたづねみて知るべし今世普通の柄は寛政の頃より初りたるなるべし家々に傳りたるものなどこれかれ見しに享保の頃迄は多く今いふ粒子形なるが多し粒子ならぬは柄の形細くして平めなり。(撰刀記)

ほ、一、目貫穴は往昔の如く遠きを良とす近きは手の裏へ響く也。(古今鍛冶備考卷一)

へ、一、建武より前なるものゝ目貫穴は皆なかごのたゞ中に穴ありそれより後應永の頃迄はたゞ中に穴あけたるもあれどもはや大かた刃まちへよりたり應永後に至りてはをしなべて皆刃まちのかたへ寄たるのみなりこの分は古人の考にて目くぎは刃まち近くへ打かた柄のしまりよきことを知り得て古へにたがへたるなるべし其わかちは物をあまた度切こゝろみて知るべし目くぎ中ばなるは緣のかたるゆるみの出くるものなり古人の心をかよはしたるはこれ等にても知べし後世の論ひと同じく辨ふべからず又太刀はゞきの刀はゞきの分によりて目貫穴の所はたがへりよく考へ辨ふべし。(撰刀記)

第二反り

撰刀記に

一、反は深からず淺からぬをよしとすべし大方太刀は二尺五寸もあらんに五六分あるをよしと

すされども、又馬上には少しく反深き方あつかいよしといふ古傳あり。

一、反に鋼元にて反付たるあり又物打にて反付たるありともに心得なくてはあつかひに利不利あり伯州大原物などには物打より反きはつよきあり又備前作りにてしもとにて反たるありてのあつかひは柄の作りざまに習あり古傳の如くさへ柄を作るときはあつかひにかはれることなけれども其わかちを知らざればともに上ふれてあつかひ難く又刃など損ずることあり柄の作りざまのことは別本に記す。

一、反深きは其太刀刀の身に備はりたる業よりは刃業も劣り又あつかひもなし難きものなり。

一、反りいたつて淺きものは居物などには業よきなどいふかたもあれどすへ物は其物を試むる迄の事なれば居物にのみ業よしとも扱ひに利なきは物の益なき業なり。

一、反りなきは太刀刀の用をなし難し其故に物を切るにはをす心引くこゝろなくてはいづれの物も切難きものなり唯刀をもつて上より直にをし切とをすこゝろをくりへて切とのきれざまは大なる違なり反なき物にして打置時分たゞ上より當るのみなり反あるものはいかに打とも反の刀につきて引心おのづから其内にこもるものなれば大なる違ひあり又反なきはかたきにあつるときは鍛によりて切たる上に刃きれなど出づるものなり又刃切出てざるはこちへずして伏すことありいかばかり鐵の鍛よしとも形に刀を取かたなければ強く物に當るときは必身に損ずるところ出づるなり物の直なるは何事にも好むことなれども其物によるわざなりよくためて矢となすとも羽を付ざれば矢の用はなし難し太刀の反りは矢の羽にひとしき物にて必ずなくてはならざるものなり或説に太刀は古への劍の兩刃なると中よりたち分けて二にしたるなれば必反なきを形とすれば反なきをよしとすなどいふことあれどもいさゝかもおのづからの理あることを知らざる論なりつるぎは兩刃なれば燒に反りは出ざれどもかたなはかたち

さま替れば焼いて水にもあれ湯にもあれ其内に入るゝにおのづから反りは付くものなり反なく作るべきには兼ねて前かゞみに作りて焼されば成り難したとへ前かゞみに作り置いてやくともいさゝか反りなきやうになるや否やのほどゝ分がたし此事は太刀刀をやきたるとなきものにはいふとも辨へ難ければおのれ焼かずともやきぬるさまを見て知るべし今直なる刀を作るには皆反りを伏せて無反とはするなり反りを伏せたるは刃かたにくるひ必ず出づるものなり木にても竹にても曲れるを直す其爲直すべき程の疵とはなるにかたき鐵もて作りたるを焼きて湯に入れてかためたるを其ゆがみを直さんには其反りの隱るゝ程のきづは必出づるなり刃のかたはしまりむねはゆるむなればつよく物にふるれば反を伏せたるものゝ折れざるといふことなし又反り淺きを深くしたるは必ず刃切表に見えざるも肉に其疵はこもり有ものなり五厘一分の反の付ゆるめはいとうまじければ夫より付もし伏もしたるは必をるゝ事を試めして知るべし。

一、近世の脇ざしとて一尺三四寸より七八寸も有るは反あまりに深からぬ方よしされども又反りなきはもとより淺きもあしし其程よき所あり。

一、鞘卷の九寸一尺ほどなるは組みてさし通すを用とするものなれば反りなき方をよしとはするなり故に古作には少し前かゞみなるものあり。

一、反の淺き深きは夫々により其なす業につきて深くも淺くも又反なくもすることなりそを古のつるぎに反なしとて太刀刀を無反りにするは大なるひがごとの限りなり古へのつるぎの兩刃なるはさすと拂ふこと業とするに片刃なるはうつ事をむねとするなり犬に猿のはたらきをならはさんとも其性違へばなし得難きに同じく八―八(元ノマヽ)其ものによりて其よきほどをこゝろみ知べきわざなり。

刀要錄に

一、古より名作と稱する刀に反りのなきは稀なり尤作人により反の姿は變れどもいづれ反りはありぬべし兵法者流によりて無反の刀は延ありとて好むものあるにより新刀には無反のものあれども是は其人の望によりて作りしものなるべし格別深く反りたる刀は過ぎたるは猶及ばざる如く害もあるべけれども更に反りなき刀は手の内廻るのみならず切味にも亦妨げあるべし古人の說を見て知るべし。

一、反りのなき太刀をば深く嫌ふべし切る手の内が廻るものなり。卜傳百首、

一、小幡山城守申分刀は長き短きに依らず直なるを嫌申候第一手の廻るものにて御座候其上切先下りのものをばるに切れず候。武具要說

一、刀の反りよきところなるは當り强し高麗陣に加藤肥後守軍兵共の敵を切りあぐみたる時肥後守イサマシメテ馬上にて幾人切倒し候哉かへしよと申さるゝに刀の直なるにては當弱くて敵倒れず反りたるにては切れずと雖も倒れぬはなし。武功雜記

刀劍或問中卷に

一、或問凡古刀は反り新刀は反らず利害如何答曰反りたるは强く打合又堅物利斷の時刃筋直に響少く横に振らず刀の損ぜざるものなり又帶たるとき拔易くつり合もよきなり反らざるは堅物を强く打時うつむく事あり餘り反りたるも亦惡し。

一、或問古刀の中心には大に反りたる有り如何答曰大に反りたるは惡からん然れども往古の太刀を見るに柄大に反りたり往古の風にて反りたらん又問然らば太刀の柄の大に反りたるは古風のみにして其故なきや答曰否余自ら鍛へて太刀を作り刀室も又自ら造る柄往古の如く反らざれば柄の棟より莖見れ出でゝ用ひ難し大に反る時は莖柄木の中にあつて堅固なり故なくし

て柄の反るにあらざる事知るべし。

刀劍道標に

一、今世の武者專ら直なる刀を好めり長二尺三寸より四寸に至りて四五分の反を最上とす去乍ら恰好十分のものいと稀なり少しは堪辨さては容易にあるべからず今又庸工反りの高きをば低くし低きを高くする事など心の儘なりかくする時は事に臨みて其害あり庸工寶を求めん爲に武士の害をなすは歎くべき事なり去乍反を直したるものは棟に皺あればよく晛る時は分明に知らるゝなり。

古今鍛冶備考卷一に

一、反りは其流派に倣ふて得失を得べし然れども腰反りを佳とす恰好よきものは鋩の利きよく馬上にては猶更利有反りなきものは鋩の利あしく餘り反り深きも又あしき也。

水心子の劍工秘傳志卷之中及刀劍辨疑卷之上に反に就ての說があるがこゝには刀劍辨疑の方を抄錄する。

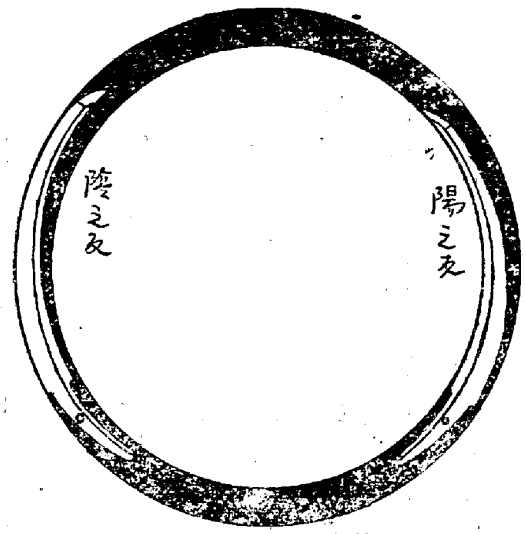
一、太刀之反左に圖(第三圖)するが如く圓規に法とつて鋒元より切先迄棟の方を落し自然と細く成したるを陰の反と號す俗に腰反とも元反とも備前反とも唱ふ去れども腰にて反りたるにはあらず全體刃方に圓規を受て棟の方は切先程段々落したる故腰にて反を附たるごとく見ゆる故腰反或は元反など共云ならわせり。

一、又圖の如く棟の方に圓規を受て刃方を鋒元より切先迄自然と細くしたるを陽の反と號す是を俗に先反とも相州反とも云切先と忠とにて反たる如く見ゆる故鳥居の笠木に似たるとて笠木反とも云也。

一、刃棟兩方ともに末を落したるを中反と號し格恰至極宜し古代の上作にあり就中粟田口物に

多し。

太刀之反法圓規之圖



第三圖

右の如く圓規を請たる刀は摺あげても姿替る事なく持心釣合宜し圖規に弛れたるは摺上る時に踏張ぬけて姿釣合惡し。

尙刀劔秘傳志下にも之と殆ど同じ事を述べてあるが夫は省略する。

第三幅及重ね

撰力記に

一、たぴら廣き物は必業よし同じ刃味にして幅廣きとせまきとのたがひは其業大かたならずせまきかた刃業はおもひの外にをとれるものなればなり。

一、重ねの厚きと薄きとは薄きかた刃業まされども地あしきはをれ損ずべきうれひ有地鐵よきに於いては重ね薄しとも折るゝことあるべからず折れまがりするは其もと太刀の太き細きにはよらざることにて地のよしあしによることなり。

一、本幅廣く上おくれて細き作りのものは刃業には無德也上下つり合たるかた刃業よろしきものなり後世の劍術者流など太刀刀を木太刀撓のあつかひこゝろにて論ふもの多ければ上おくれたるをつり合よし又上かろくして拳つかれすなどいへども實のつり合といふ事はよくも知ぬなり又戰場にも化物はなし打にも學びならはしのごとく幾立合もうちつゞけて手もたゆむ迄たゝかうことはあらぬことなり又上をくれざるをよしとせば世人戰國の頃武器の吟味明暮ありてあしきをばふきたる世に上おくれたるものをのみ多く作らざらんや建式以前の物など

にはまれ〳〵先おくれたるも見ゆれども夫より後の作元和にいたる迄上おくれたるはいとまれなりことに建武このかた相州備前其外國々にて良き工のつくり出たるはいづれもかさねうすきかたにてはゞ廣し上おくれてみすみなるはまれなり近世の論ひにかゝはらず古人を見て其よしあしをば知べきことなり。

一、かさね薄きも幅廣きときは幅の助にて強しかさね厚くともたゞせまきはたゞ一方のつよみにて幅にて助くるとは大なるたがひあり。

古今鍛冶備考卷一に

一、太刀鋒元關際より鋩横手際に至て歩合を落すに規矩有爰に大凡を錄す譬へば刃長さ一尺にして關際の幅八分重ねは二歩に造るものは鋩横手際に至つては幅六歩六厘重ねは一歩六厘に摺立る也或刃長さ二尺三寸五分の刀にて元は幅九歩重ね三歩に造る刀は横手際の幅五分七厘一毛重ねは二歩六毛に摺立る也都て刀の長さ一尺に付て幅は一分四厘落し重ねは四厘落の割合なり此歩合の定規を以て何尺の太刀を造るといふとも釣合格好勝て佳也。

刀劍辨疑上及劍工秘傳志中に

一、刀の幅鋒元にて一寸より一寸二分迄を定法とす是より廣きは尋常の人の手に握り餘る故也依て大太刀といへども幅は一寸二分に極むべし然れ共望ある時は需に應じて法に拘はらず重ねは鋒元にて二分より三分迄を程合とす是より厚きは是又尋常の人の力に餘るが故なり尤望ある時は法に拘はらず。

一、幅重ねの本來の格恰は大切先なる時は刃の長一寸に付鋒元の幅より帽子横手際の幅を六毛細くし重ねは三毛薄くす。

一、中切先の刀刃の長さ一寸に付幅横手際にて一厘四毛狹く重ねは四毛薄くすべし。

一、小切先の刀は刃の長さ一寸に付横手際にて一厘五毛狹く重ねは五毛薄くす。

一、中切先常に造る所ゆへに幅重ね落し加減並忠長さ一尺より三尺迄の割合左に記す。（之は劒工秘傳志のみに出づ）

一、刃長一尺の刀（幅横手際にて一分四厘落　重横手際にて四毛落）　忠長三寸六分口傳
一、同　一尺一寸（幅一分五厘四毛落　重四厘四毛落）　忠長三寸六七分口傳
一、同　一尺二寸（幅一分六厘八毛落　重四厘八毛落）　忠長三寸六分（但七八分迄も口傳）
一、同　一尺三寸（幅一分八厘二毛落　重五厘二毛落）　忠三寸九分
一、同　一尺四寸（幅一分八厘二毛落　重五厘六毛落）　忠四寸二分
一、同　一尺五寸（幅二分一厘落　重六厘落）　忠四寸五分
一、同　一尺六寸（幅二分二厘四毛落　重六厘四毛落）　忠四寸八分
一、同　一尺七寸（幅二分三厘八毛落　重六厘八毛落）　忠五寸一分
一、同　一尺八寸（幅二分五厘二毛落　重七厘六毛落）　忠五寸四分
一、同　一尺九寸（幅二分六厘六毛落　重七厘六毛落）　忠五寸七分
一、同　二尺（幅二分八厘落　重八厘落）　忠六寸
一、同　二尺一寸（幅二分九厘四毛落　重八厘四毛落）　忠六寸三分
一、同　二尺二寸（幅三分八毛落　重八厘八毛落）　忠六寸六分
一、同　二尺三寸（幅三分二厘二毛落　重九厘二毛落）　忠六寸九分
一、同　二尺四寸（幅三分三厘六毛落　重九厘六毛落）　忠七寸二分
一、同　二尺五寸（幅三分五厘落　重一厘落）　忠七寸五分
一、同　二尺六寸（幅三分六厘四毛落　重一分四毛落）　忠七寸八分

一、同　二尺七寸（幅三分七厘八毛落　重一分八毛落）　忠八寸一分
一、同　二尺八寸（幅三分九厘二毛落　重一分一厘二毛落）　忠八分四分
一、同　二尺九寸（幅四分六毛落　重一四分一厘六毛落）　忠八寸七分
一、同　三尺（幅四分二厘落　重一分二厘落）　忠九寸

右大抵如此也餘は推て知るべし云々。

イ、肉置

い一、刃のきるゝときれざるとは刃肉のおきざまによりて大なるたがひあり肉のつけさまよろしきときはきれざる刀も刃業をまし又こぼれざる刀も刃をこぼすこと有されば地刃すぐれたる刀を撰みて其刀の刃を肉よく付るときは人々の驚く計りなる大業をばするなり（中略）世の劍術者流などいへるうちに刀の肉置は恰刃（蛤刃？）にあらざればかたきを切せをよくせずなどいふものあり其恰刃といふはいかに刃を付たるやと見しに刃ふちにあしき肉付て刃もつかて有なり斯のごとき刀にては打殺するにはよかるべけれども切べき料の刀とは思はれざる肉置なり刀の切ると切れざるとは其みなもとは地鐵をもととし其次には火のたりると足らざるとにもより夫より又刃肉のつけさまにもよりて種々のまさりおとりあり。（下略）

一、刃じゝはしのぎより刃先迄いづれを初終とのさかいねさゝかむらなくすなほに付たるこそかたきにもさもあらぬにも切こゝろよけれ其肉の置さまにはほと〳〵有てくはしくはしるしがたければをしはかりても知べし肉刃ふちに付過て刃先落たるは切がたし又刃なきはすはだにはともあれかたきにありては必刃損ずることありされども刃によりては厚き薄きの論ひなくあしきは厚くともかけこぼれもなし安く地刃よきものはうす〳〵とも其きづなきものなれどもつよく物に當り又は手の内ゆるみなどして刃かたむく時は刃肉うすきは損じ安し肉は多

からず少なからずよきほどにとがしむべし又本すえとも刄肉にむらなきやうにすべし又先に肉ありてもとにくなきはは〻きもとより物にふれてはまがり安し又ぼうしに肉なきは切先こぼれ安し刄じゝのわかちは其ものを見て辨へざればくわしく知り得がたし。(下略)（撰刀記）

ろ一、刄肉に苔み發きと云事あり是は花のつぼみの形とひらきたる形とにたとへて示すにて苔と云は(第一圖)の如く刄肉多きを云發きとは(第二圖)の如く刄肉なきを言也依てつぼみ過ずひらき過ず中分なるを刄肉の至極とす又切先棟の方も同じ心也苔過たるもひらき過たるも惡し中分なるをよしとす。

第一圖

第二圖

第三圖

一、左に著はす處の刄肉の圖何れも刄先二三分の間刄肉を置事口傳あり刄先二三分の間とは圖の如く(第三圖)此邊の事也あまり刄先に肉あり過たるは切れ味鈍し口傳多し。

一、左に圖をあらはせし中に相州とあるは兩平の肉むつくりとして棟厚からず諸流とあるは兩平の肉すくなく宗の方厚し諸流大體斯の如し。(刀劍辨疑卷之上)

肉置之圖

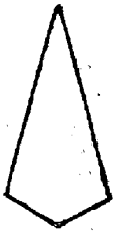
鎬造大肉大抵如是

相州正宗一流平作肉置

用造中肉大抵如是

諸流平造大抵如是

用造無肉大抵如是



諸流短劍重厚物如是

尚同じ人の劒工秘傳志卷之中にも之と略同樣のことあれども省略す。

は、一、帽子の肉置と云へども總體の肉置皆鎺元に準ずる者也故に帽子の肉置は鎺元に有と云也然る故に鎺元の肉置誠に肝要也猶切先口傳有り。（劒工秘傳志卷之中）

宗方鉾先肉置口傳

ロ、鎬

い一、しのぎむねのかたへ寄たるは刃業に德あり刃方へよりて有は劣りぬべし又しのぎの高きとひくきとにては其業低きかたまされりされどもおほかたの世の論ひは地刃のさまをばよくもしらで重ね薄きはよはくしのぎひくきはあしければあつくみすみかたちにしてことにしのぎ高きを好むなどいふみだりごとをいふもの多ければ考へも辨へもなくその說をむべなりと思ひ其ひがごとをつぎ〳〵に傳ふる故にをれまがりすることは厚き薄きによらずなどいひさとせどもかへりてひがごとと聞なすものなり。（撰刀記）

ろ、一、鎬ノコト高キヲ上トス上古ハスベテ凌ギ高シ下作ハ究メテ低シ又備前物ハ多分三角作リトイフテ幅狹ク鉈アツク因ツテ鎬ノ低キモアリ最鎬ノコトハ戰場ニ於テ鐵棒或は大薙刀等剛敵ト戰ツテ不折タメ其難ヲ凌ノ意也新刀ハ總テ低シ近世ニ至ツテ猶更ナリ此ニ依テ密ニ疑フ近世久シク治ツテ太平ナル故ニ試ニ罪人ノ體ヲ試シテ切味ノ善惡ヲ論ズ因テ凌ヲ鉈ニ寄セテ狹クシ刃肉等多キヲ嫌フ此マタ時花ノ所謂ナランカ。（刀劍固癖錄）

は一、鎬の立所四六の矩どてたとへば幅一寸の刀には刃方六分棟の方はいおり共に四分と定るなり是にて格恰好きものなり尤家々の風ありといへども余が造る所斯の如し。（刀劍辨凝卷之上）

に一、鎬を打つ事譬へば素延にて幅八分重三分有る時は鎬を打て幅一寸一分と成る者也然ども小

鎚中高なる時は長に延びて幅出兼る者也又小口の平なる鎚は長に延び兼る者也、然れ共小鎚の遣ひ加減にて自在にする是は素延にて宗方刃方同じ厚さに延べたるを以て云也口傳なり又鎬の立所四六の金とて幅一寸有る物には刃方六分宗方四分にて格恰宜し餘は是に準じて知るべし。

（劔工秘傳志卷之中）

八、樋

い一、刀に樋をかく事或説にたとへば紙をそのまゝ平に持ばしなひて垂下る中をくぼめて持てばしなはず垂下らず此心にて刀の樋も刀を強くする爲なりといへり紙と刀と一例には云ひ難し又或説に刀に樋をかく事馬上にて拔時はぬけ難きものなり樋をつまみて二度にぬく爲なり又樋ある刀を振れば鳴り音あり臆病ものおそるゝなり是又一德なりといふ説あり馬上にて拔き易きほどの刀をさすべき事なし又臆病ものは鳴り音なくても恐るべし唐土にては樋の事を血槽（チヒ）といふなり武備志に見えたり血槽と書てちふねと讀む血を入る箱の事なり人を切たる時血が樋の中へ入りて流れば刀に多く血凝りつかざる爲なり血にまみれて血こつつけばねばりて切りの障りになる事あるべしとの用心なり無題隨筆。（劔論）。

ろ一、樋ある刀は曲るとも折るゝことなし子細はきたいの薄刀に必ず樋をかくなり、高虎雜話。

（刀要錄）

は一、樋ヲカクコトハ道具ノ位ヲ附テ又重キ物或ハ疵抔有ルヲ樋ヲカクコトモ有リ後樋ハ下手抔ニカヽセルトキハ釣合惡シク又村等モ有ル物也吟味シテ上手ノ鍛冶ニカヽスベキコト也。

（新刀辨惑錄二）

以上は只參考資料を羅列したのみである。

要するに刀劔の長さは萬人に普遍的な一定の寸尺はないと云ふことに歸着するそして窪田清音

に從へば自分の力にかなひさへすれば一寸でも長いのがよいことになり刀劍實用論、古今鍛冶備考等に從へばむしろ短い位の方がよいことになる又小倉氏の說によれば其持主の身長に或る係數を乘じ得た積を以て劍尺を定めるのである其係數は何から出たものであるかは不明であるが是亦一方法であらう。

中心は刀身の大約三分の一位がよいといふことは當研究室の試料刀に就て調べた所によれば事實のやうである。

又反りに就て水心子の說及刀劍秘傳志の說に從へば所謂圓規を受けてゐなければいけぬと云ふやうに述べてあるが是は前記の試料刀によつて實驗した結果によると圓規等は受けて居らぬと云ふことが出來る。

終りに引用した刀劍書の題名をかゝげて置く。

刀要錄　劍尺記　刀劍長短論　撰刀記　刀劍辨疑　劍工秘傳志　刀劍實用論　古今鍛冶備考
劍論　刀劍固癖錄　刀劍道標　新刀辨惑錄　刀劍秘傳志　雜誌刀の研究